



NO. 176

# 響音 (ひびき)

発行 チャイルドライン ハートコール・えひめ  
〒790-0808 松山市若草町8-3  
松山市ボランティアセンター気付  
Tel 089-923-9558 Fax 089-916-9710  
E-mail heart-call@kke.biglobe.ne.jp  
http://www7b.biglobe.ne.jp/~heart-call/  
発行責任者 染川まどか  
発行者 染川まどか  
編集者 三好久恵

## 第22期受け手ボランティア養成講座終了しました

10月16日より11月27日までの約2ヶ月間、全11回の養成講座が無事終了しました。12名と昨年の受講生1名、13名の参加がありました。(うち1名は初回のみ参加でした)9名の方が受け手登録され、新しくスタートします。

第1回は公開講座とし石井志昂氏を、また今回初めて講師をお願いしました越智清子氏・重松章子氏をご紹介します。石井氏の公開講座は団体初めてのZOOM研修もしました。名古屋からの現地松山への参加もありました。

第1回公開講座 石井志昂氏 (不登校新聞編集長)

### 「学校に行きたくない子どもとの付き合い方」

不登校新聞編集長でもありながら、年間70本もの講演会など行われている石井志昂氏をお招きしました。ご本人も中学2年生から不登校を経験され、たくさんの仕事を経験のち、19歳で不登校新聞に入社されています。

不登校に対して社会や文部科学省の考え方は変わってはきました。不登校を問題行動と判断してはならない、学校復帰という結果だけを求めない、最終的な社会的自立を求める。しかし、そのことが隔々

まで浸透していくにはかなりの時間がかかり、学校に行きにくい子ども、その家族の苦しみは続いています。SOSはなかなか言葉として出せないから、身体に出てくる。思いつめての「学校行きたくない」の言葉に「頑張ろう」ではなく、曖昧に生返事で「わかった」で対応しましょう。子どもに必要な雑談、大人に必要な息抜き、このことを大切に考えてください。

子どもの心が回復するまでには、身体に出てきた症状を回復、感情を噴出させてあげる、言語化、話をとことん聴きましょう。少しずつの親離れです。親に必要なことは、仲間を作って我が子を支えること。不登校のその後を知ることです。

人には不登校が必要なきともあると石井氏は話されました。

#### 感想

・人生に無駄なものはなく、勢いよく前進できていると実感するとき、サナギの時期があるのだと思いますが、チャイルドラインで雑談を通じて話をじっくり聴き、一緒に考えたり、伝えられたらと思います。



・心の回復を図るうえで不登校も必要な選択のひとつであるとわかりました。子どもにとってなかなか言い出せないことを大人に伝えたときに、しっかりと受け入れてくれる親や周りの大人が必要であると感じました。

---

第6回 講師 越智清子氏（精神保健福祉士・社会福祉士）

## 「傾聴と技法」

傾聴とは、わかろうとする耳を傾けて聴くこと、何気なく聞くことでもなく、自分の知りたいことを訊くことでもない。相手が伝えようとすることを、わかろうとすること。自分の壁を取り払って心も身体も傾けて聴くこと。

受動とは、無条件に受け止める、肯定的に関心をもつこと。共感的

理解とは、あたかも自分自身のように感じる事。自己一致とは、

聴く側の心も大切に、わからないことはきちんと聴くこと。自分

の思いを相手に伝えるのではなく、自分の今の気持ちを感じ、感情をコントロールすることが大切。相手の感情を否定しない、怒りや悪い感情も受け入れる、相手は受け入れてもらいたいと、わかってほしいと思っている。自分の価値観と違うことでも否定しないでわかろうとする。なぜ聴くことが出来ないか、先入観でみる、無関心、自分の興味を優先、正論を言う、間違いを認められない、役に立ちたいと思いアドバイスを言う、親切に自分の経験で話すなどが、傾聴を妨げる事。相手の味方になることが大切。



### 感想

・聴くことの大変さと、大切さがよくわかりました。まずは自分のことを知ることから始めないといけないのかなと思います。話を聴いて大変難しいなと思いつつ、良い学びになったなと思います。

---

第7回 講師 重松 章子氏（キャリアコンサルタント）

## 「子ども時代に立ち返る」

子どもの話を聴くには聴く側の大人が、自分の子ども時代に立ち返り、その時に言いたかったこと、伝えたかったこと、季節や、時間や、においなどを思い出し、自分の感情を探っていくという難しい作業が必要。しかし、話し始めると、そうだ私はあの時こんな気持ちだった、こんな風に言ってほしかった、とよみがえってくる。この気持ちを忘れないで、子どもたちに向き合うことが大切。この「子ども時代に立ち返る」は養成講座には重要な講座です。

### 感想

・話を聴いてもらうこと、共感してもらうことの大切さを改めて感じた。同時に、人によって記憶は曖昧なものだと思った。時代は違う、今の子どもたちは私の生きてきた時代と違うけど、気持ちを理解することはできる、私にできるのだろうか。今日私の話を聴いてもらった体験と、いろんなことが学べてよかったし、充実しています。

## 9月受け手のための継続研修

9月23日（金・祝）10：00～12：00 松山市総合福祉センター

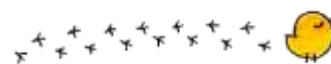
司会進行：スタッフ 参加者：8名

テーマ 「ヤングケアラーについて」

最初にビデオ「私を説明する言葉があったんだ」（24分32秒）を見ました。報道特集2018年12月15日放送されたものです。

都内に住む38才の女性Nさん、高校2年の時に祖母が脳卒中で倒れてから20年間ひとりで介護をしている。祖母は現在98才、両親は若い頃離婚していて、祖母が育ててくれた。この生活が毎日、朝から夜まで続く、ヤングケアラーという言葉を知ったのは最近。それまで自分は何者でもなかった。でも自分を説明する言葉があるんだと知った。と語るNさん。

チャイルドラインにもヤングケアラーではと思われる電話もあります。Nさんのように自分のことを話すことで気持ちが少し楽になることもあります。一歩踏み出せたかもしれない。何処かで誰かと繋がって話ができることの大切さを感じました。



## ハートコール・えひめの20年 パート7

今回は、スーパーフジラン松山1Fグランドームでのイベントです。設立して7年、何とか地域の方々知ってもらおうと企画したイベントです。助成金を書き、たまたまフジの常務がスタッフの同級生で（コネを使い）大イベントになりました。

「聞いて僕たちの声、感じて私たちの心」と大きく看板を上げ、出演者は地域の方々、劇団「無邪気」・音楽グループ「でんしれんぢ」・紙芝居「どうしていじめるの」「目の見えない犬ダン」・ビービーダンススタジオ、これだけでも大変なのに、ハートコールの名が入ったハート型風船500個・テッシュ1,000個を配り、ヘリウムガスを使って声を変えてみるなど、どうしてこんなに考えたのかというほどです。そして、チャイルドライン夢メッセージ展絵馬展も展示しました。

それぞれの出演団体の方々にも協力、お手伝いいただき、スタッフ総動員でも人が足りず、いろんな方に声をかけ、何とかやれたものです。

準備も大変で、チラシは43,000枚配りまくり、出演団体とは何度も何度も打ち合わせをし、ヘリウムガスをお願いしたガス屋さんは、こんなこと今までなかったと驚かれ、何よりフジ様は受けたものの一体どうなるのか不安げでした。当日、血相を変えて来られたのは、前日こんなこと「この社長の駐車場だけは車を止めないで」と言われていたにもかかわらず、車が止まっていたからです。遅れてきたスタッフが見事に止めていました。不安の中、とにかくひたすら謝りました。それでも、スタッフの昼食会場も提供くださり、親切に何度も全てを説明してくださり、感謝でした。

会場を訪れた人は1,500人にもなり、大勢の地域の方々との交流ができ、ハートコールを知らせる大きな事業となりました。できないと思っていたことができた、これはどんな小さな団体でも強く願えば叶うことがあると感じられた出来事でした。

今、20年を過ぎ活動できていることは、この出来事も大きくかかわっていると思います。あんなことようやくやったよね、お願いに行った方もやけど受けた方もえらいわ、同級生って気の毒やない、もう二度とやらんよね、語り草です（今思い出しても汗がでます）。

次回は、講演会・受け手養成講座・継続研修、ハプニングだらけです。また読んでください。

ソロプチミスト日本財団  
社会ボランティア賞受賞

数年前から毎年ご寄付いただいていますソロプチミスト松山様より推薦で、社会ボランティア賞に応募し、ありがたいことに受賞が決定しました。

贈呈式は11月8日（火）広島であり、残念ながら参加はできませんでしたが、12月20日（火）ソロプチミスト松山様定例会で挨拶をします。賞金は大切に、カードや告知、社会発信のために使わせていただきます。

愛媛民主教育研修所に招待されました

8月28日（日）愛媛民主教育研修所に招待され、ハートコール・えひめについてお話してきました。この研修所は、学校現教諭や元教諭たちで構成されており、長年に渡って子どもたちの教育について熱心に研修されています。今の学校現場の様子や、退職されて尚子どもたちにかかわる様子を知り、地域の大人が地域の子どもたちを温かく見つめていく大切さや、ひとりも取りこぼさないという熱意が伝わってきました。元気をいただきました。

2022年度第3回中四国エリア研修会ご案内

テーマ 「子どものSOSの受け止め方」

日時 12月18日（日）19時～21時 ZOOM 研修

講師 高橋聡美氏

自衛隊中央病院高等看護学校卒。国立精神・神経センター国府台病院精神病棟・心療内科病棟で看護師としてメンタルヘルスに長年関わる。2003年～2005年スウェーデンでメンタルヘルス制度について調査。帰国後、宮城大学看護学部精神看護学領域で看護教育に従事する傍ら県内の自殺予防活動に着手。2011年仙台在住中に311大震災を経験し、その後は被災地の遺族ケアを実施中。2020年4月より中央大学人文科学研究所客員研究員。2015年5月に一般財団法人高橋聡美研究室を設立。BPO（放送倫理・番組向上機構）委員、前防衛医科大学学校精神看護学教授。

編 集 後 記

毎年言っていますが、カレンダーが残り1枚、あっという間の1年、もう正月が来る、いやはやでございます。言いたくはありませんが、またひとつ年を取らせていただきます。

今年の養成講座では9名の方が受け手登録をされました。今回はずいぶん若い方が多く、平均年齢がぐっと下がりそうです。子どもからの話を聴くことに、若いも年配もなく、電話を取っている年数もないのですが、自分に気づくことが大切で、悲しいかな、年齢や年数を重ねると、自分自身おろそかになるような気がします。毎年ひとつ年をいただきますが、自分に気づける大人でいたいと思います。

来年もどうぞよろしく願いいたします。（染）



Merry Christmas and Happy New Year

